

氏 名 澤田 晴美

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第 1210 号

学位授与の日付 平成 21 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 近代日本文化における伝統演劇と近松門左衛門
ーアカデミズム・劇評・役者の身体

論文審査委員 主 査 教授 鈴木 貞美
教授 笠谷 和比古
教授 早川 聞多
名誉教授 鳥越 文蔵（早稲田大学）
教授 Andrew Gerstle（ロンドン大学）

論文内容の要旨

本論では、「伝統文化を現代の学生にどのように教えるべきか」という問題意識に発して、「なぜ代表的な古典の一つに近松門左衛門があげられるのか」、「代表的な日本文化の一つとして歌舞伎や人形浄瑠璃が取り上げられるのは何故か」などの疑問、つまりは「伝統演劇は現代にどのように生き残ったか」という問題を考察した。

考察にあたっては、前近代の事象の近代における「読み替え」と、演劇の特性である「記憶される舞台」に留意した。ただし、演劇を特別扱いするのではなく、演劇も同時代の文化潮流の中にあることを意識しながら、それでもなお演劇故に留意すべき特殊性をあぶり出そうとした。これまでは、近世演劇研究の分野において、文学としての戯曲研究、劇評、役者や演出家の芸論が、近代以降も視野におさめて、総合的に扱われることがなかったことを踏まえて、その不足を補うために出来る限りそれらを対等に議論の俎上にのせた。

第一章では、近松門左衛門の晩年の最高傑作とされ、現在でも上演される「心中天網島」を事例として、近松の古典としての評価と、伝統演劇としての上演がいかなる関係にあるかに注意を払いながら、近松作品の改作を概観した。近世における近松作品が自由に改作されているのは、先行作を変更することが趣向になるという近世の作劇における意識と、人形浄瑠璃の舞台技術の変化や人形浄瑠璃を生身の役者が演ずる歌舞伎に置き換えるために生じる変化など、作者以外の要因が作品に影響を及ぼすためであった。近代に入り、近松の評価が高まると、近松の「原作通り」の上演が模索されるが、歌舞伎においても、近世期に舞台技術が変化した人形浄瑠璃においても、「原作通り」の上演は「初演通り」とならず、改作が行われた。その一方で、近世期に改作上演を繰り返すうちに定着した演出が型となって伝承され、それを観客が期待する故に「原作通り」の演出の中に改作の演出が併存するという状況を生み出し、さらに現代の研究者による近松の原作に対する研究成果が反映して、古典化された近松のオーセンティシティと伝統演劇のオーセンティシティがぶつかり合いながら、現代においても近松作品の「伝統的な」上演の創出が行われ、それが伝統演劇として受容されていく姿を明らかにした。また近松作品の近世期の改作は趣向を重視した「より新しい改作」であり、近代の改作は原作に忠実な「より正しい改作」をめざすという違いがあることを指摘した。

第二章では、近代的な戯曲（演劇）研究の嚆矢として、坪内逍遙の近松研究をとりあげた。逍遙が近松を取り上げたのは、近世期に作者として評価されていたこと、明治の知識人にとって身近な江戸後期の戯作者が上演と関係なく古典として既に引用し、近代の文学における「作者」に通じるものとして近松を読み替えることができたからである。近松は近世期では扱われなかったアカデミズムの分野で、戯曲を重視し、原作を尊重し、登場人物の性格を重視した近代的な手法を用いて評価されるようになった。しかし、近代の知識

人による上演と切り離れた戯曲研究が、実際に上演された戯曲に対しては必ずしもうまく適応できたわけではなかったのは、戯曲と舞台の関係を完全に切り離せなかったからである。

第三章では、二章でみたアカデミズムにおける戯曲を文学として批評することが、観客の視点にどのように関わるか、劇の批評の出版物としてのジャンルの性質に注意を払いながら考察した。近世と近代の劇評は、どちらも舞台の批評ではあるが、その性質の違いは、近世の劇の批評は役者の新しい工夫を評価の基準に置き、近代は正しく戯曲を表現している型（演出）を評価の基準においた。その一方で、近世において行われた役者の出演歴や芸系に関心を持った役者の批評は、近代の「型」という批評方式に通じるものとなって、読み替えられた。それは、舞台が記憶され、過去を参照するという演劇の特質によるものである。しかし、近代に入っても様々な型が伝承されていたにもかかわらず、正しく戯曲を再現するという基準で取捨選択されたために、近代以降にオーセンティックな伝統演劇の演出が創造されることになったことを指摘した。また、近代に入って新しい劇評の方針として戯曲を重視するようになるが、そのような劇評家も実は「通」な観劇態度を全く否定していなかった。この通の視点は、「伝統」と深く関わる可能性があることを指摘した。

第四章では、近松の言説「虚実皮膜論」と近代に移入された「リアリズム」について比較考察を行った。近世近代にかかわらず役者の身体表現を中心に重視されたリアリティは、近世においては「情」の表現が重視され、近代では「情」や「心」は近代的な作品批評に重要な「性格」や「内面の表出」につながるものとして読み替えられた。このような近松の芸論の読み替えによって、戦前から戦後にかけてリアリズムを指針とする新劇と同時代の演劇として、また日本民族の正しい演劇として歌舞伎を改革する者たちにとって近松は重要な理論の下支えとなった。また、近松作品が義理と人情の葛藤を描いているという近代の評価は、近代以降の虚実皮膜論の解釈にも及び、さらに日本の文化の特色を体現するものとして見られるようになった。そして、近松の評価の高まりとそれに伴う影響について考えるには、明治期の国民国家形成期ではなく、戦後に目を向ける必要があることを指摘した。

以上の考察を通して本論は、伝統演劇である歌舞伎、人形浄瑠璃を、複雑な「断絶・継承・再生」を繰り返しながら、過去の遺物ではなく現代にも生きているものとしてとらえ直した。

歌舞伎や人形浄瑠璃は、近世における現代劇から、近代においては演劇の中の一ジャンルとして確立され、その表現様式を保持した。ジャンルとしての様式を保持しているために伝統が保証されているように思われるが、実際は舞台装置や演技においては変化し続けている。それでも伝統的だと感じさせるのは、第二章で見たように近世期において近松を作者とすることが、近代の文学における「作者」につながり、第三章でみたような近世の役者の芸や作品の筋についての豊富な知識と観劇体験が、正しく戯曲を表現する「型」という近代の批評基準につながり、第四章でみた近世において重視された「情」が近代の「性格」につながったように、前近代の事象で近代が受容出来そうなものを巧みに読み替えることで、前近代の視点を完全に捨て去ることなく伝統を創るというシステムが機能していたからである。

伝統や古典は近代に巧みに創り出され、前近代の伝統や古典の価値が現代に至るまでそ

のまま継続していると「幻想」をいだかせる。しかし、第一章や第四章六節で例示したように演劇が過去の舞台を参照し、その過去が役者の身体に宿り、観客はそれを記憶し、実感を伴って伝統を感じさせる性質を持っており、近現代人にアクセス可能なものとして考えられるようになった。

論文の審査結果の要旨

澤田晴美提出の当該論文は、近松門左衛門作の浄瑠璃、歌舞伎、とりわけ世話物に対する批評を材料とし、演劇に対する批評のあり方を、元禄期から明治期後期、さらに今日にいたる期間にわたって、またジャーナリズム、アカデミズム、演劇に直接たずさわる人びとの三つの世界において丁寧に跡づけようとしたものである。

成果としては、第一に、江戸時代においては、「役者評判記」と呼ばれる出版物をひとつのジャンルと考え、役者の相貌から演技の評へ、芝居の趣向へと批評の対象が移りゆくさまを、周辺の刊行物との関係をふくめ、豊富な資料をよく読み込んで浮き彫りにしたことは、出版史研究がまだジャンル史を展開していないことに鑑みても、研究方法の開拓という側面をふくめ、画期的なものである。

第二に、明治期について、坪内逍遙グループが戯曲を文学として評価する態度を決定的にしてゆく過程を、出発期の同人雑誌『葛の葉』から徹底的に探り、それが戯曲に対する近代批評の方法の開拓を伴うものであったこと、その原本主義が今日に至る演劇界の原本回帰傾向の根源になっていることなどを示すとともに、戯曲本位の態度にも揺らぎが見られることも明らかにした。他方、三木竹二によって、戯曲の比重を強めながらも、役者の所作や全体の趣向についての幕末期の批評の手法が演劇ジャーナリズムに継承されたことを示した。これら双方の動きを比較し、相対化しえたことは出色である。

第三には、今日にいたる役者の芸談を分析し、先輩役者の演技の記憶が身体所作に刻みこまれて伝承されることなど、ジャーナリズム、アカデミズムとは異なる評価基準が演劇人のあいだに今日まで継承していることを示した。総じて、評価対象とメディア、評価の担い手によって異なる批評内容が分かちもたれ、それらが互いに照射しあい、また反発しあいながら、虚実皮膜論、義理・人情論、所作のリアリズムの内実などを変化させてきた過程、すなわち演劇およびその評価史の総体を文化史として描きだすという壮大な課題に挑戦し、その突破口を切りひらいたことが各審査員から高く評価された。

ただし、虚実皮膜論(江戸時代の演劇におけるリアリズムの内実)や義理・人情論については、既論の限界をよく指摘しつつも考察の端緒をひらいたに留まっている。また逍遙グループの文献精査からは、かえって未発掘の課題が判明した。方法論の上では、考察対象を近松の世話物の劇評に意識的に限定したために、江戸時代の読み物としての近松について、また近現代演劇に、たとえば四世鶴屋南北の果たした役割との比較検討などが考察から除外される結果を招いた。将来の課題としては、明治中期に新たに編成された「日本文学史」における戯曲評価史との関係解明も要請されよう。劇評文化の通史を完成させるために、なお克服すべきこれらの問題群が論者によって意識されていることは行文中及び審査時の応答にも明らかであり、膨大な文献、豊富な知識と多岐にわたる問題意識を整理しきれていない恨みは残るものの、大きな発展可能性をもつ豊穡さは本論文の達成を損なうものではない。以上により、澤田晴美提出の当該論文を合格とする。